

物々交換誕生の論理 — 矛盾モデル拡張による弁証法論理再構築のための — Logic of the Birth of Barter — For Restructuring Dialectical Logic by Expanded Contradiction Model—

高原 利生*1
TAKAHARA Toshio

*1 所属なし

1. はじめに：変更と矛盾

はじめて道具や言葉が作られ使われたことがあったと同様に、ある段階で、物々交換という行為が成立した。無断で持つてくる、あるいは闘って勝ったほうが相手のものを手に入れるのではなく、平和的な物々交換という奇跡が、生産の歴史のほとんどの時間をかけて成立した。[TS2010]

なぜ？どのように？本稿は、物々交換の成立の論理を明らかにし、弁証法論理再構築[FIT2011] [TS2011]をすすめる。

生きることは事実を変更する過程である。変更は相互作用によって起こる。弁証法論理は、物事の相互関連と相互作用を扱う論理である。マルクスは、ヘーゲルの、矛盾への外部運動の作用の軽視と、すでにある対立項間の関係しか扱わない自律矛盾を、弁証法論理に持ち込んだ。まだその悪影響から抜け出せていない[MKN] [MKN_TKHR]。筆者は、矛盾を、運動を起動する対立項の相互作用とする近似モデルで変化、変更を扱っていた[FIT2011] [TS2011]が物々交換という制度[TJ2003Jun]の始まりをうまく説明できなかった。

2. 物々交換の成立

物々交換には、自分の前にあるものと相手の前にあるものがそれぞれの共同体の所有であるという認識像と、相手のことをも考えた、自分の共同体の所有物と相手の所有物の同時物々交換予定像から構成される共同観念を、代表者がお互いに事前に持つことが必要だった[TS2010]。

物々交換という制度は、構成メンバーの観念間の矛盾と、ものの、ものとしての属性と制度としての属性の矛盾の二つの矛盾に担われる[TS2010]。この点、言語に似ている。

最初の物々交換という第一段階で、対立項がない状態から、その最初の行為をする二人の代表者の観念という対立項に、この共同観念が、矛盾の解として共有された。(矛盾の解の型、タイプに二種ある。両立と差異解消である。[FIT2011] [TS2011]) どうしてこの解が得られたのかは謎である。共有は、両立したものが同じ属性の同じ値を持つ場合である[FIT2011] [TS2011]。この過程で付随的に、被交換物内で、ものの使用価値に制度上の交換可能性という属性が追加され対立項が準備される。

次に、第二段階で、物々交換に失敗する共同体は衰退する一方で、その成功の継続は、物々交換を、次第に継続的必然的なものに変えていく。共同観念として物々交換という制度が定着し、被交換物に、差異解消の矛盾が(交換)価値という属性を定着させ商品が成立する[TS2010]。

ここから「資本論」が始まる。その後、物々交換は自己意識、「所有」意識の世界も開いていく。

外部運動が矛盾をつくるメカニズムの謎の解決のための仮説は、「女性の世界史的敗北」以前だったと推定される

最初の物々交換でも、その代表者は武力に優れた男であり得るので、二つの共同体の交換の代表者が男と女である可能性は大きく、この二人の恋が最初の物々交換を可能にしたというものである。この謎の解明は今後の課題とする。

矛盾への外部運動が、二人の代表者の観念という対立項に、共同観念共有を起こさせ、この矛盾とその解の生成を、対立項も何もない状態から可能にした。さらにこの矛盾が起こす運動が、もう一つの矛盾の商品の対立項を準備した。

外部運動に二種ある。現実の客観的力と人間の価値実現の意図的努力である。これらの一つは、物々交換成功と頻度の増大による分業による生産力の増大要請であった。これは、当時は、道具の改良と共に、人の生命という価値の最も重要な客観的増大手段だった。さらに、人的損失を少なくしようとする共同体の代表者の意図的努力と、相手のことを思いやる価値があった。

外部運動の役割は、この場合のように、対立項がない状態から矛盾を作る場合に最大で、種子のように生命の歴史を凝縮した内容を持っているものの発展の場合小さい。

3. 結論へ

矛盾を、外部運動が生成するまたは運動を起動する対立項の相互作用と拡張して[FIT2011] [TS2011]を修正する。

このモデルにより、物々交換の成立の論理を矛盾により理解する道が開け、マルクスの弁証法の弱点が克服される。

人の行為の場合、まず、現実と人間の価値の認識がある。現実とあるべき姿の間に差異を生じない場合は何も起きない。差異が生じる時、次の運動のいずれかが起きる。

1. 媒介がない人類最初の行為の場合、

11. 制度の場合、外部運動が、共同体の個体間の観念という対立項と、両立,共有をめざす相互作用により矛盾を作り、共同観念の両立,共有という媒介化の解を見つける。

12. 技術の場合、外部運動が、自分と対象という対立項と作用を良くする意図という相互作用によって矛盾を作り、手の作用機能のある属性の独立、実体化により、道具という技術手段による媒介化という解を見つける。

2. すでに媒介がありそれを変更する場合、差異を認識し、意図的行動媒介物の機能、構造を変更。

3. 意図が隠れた自律矛盾による運動。

参考文献

[TJ2003Jun] Takahara Toshio: "Application Area of Thinking Tool or Problem Solving Tool", The TRIZ journal, Jun.2003.

[TS2010] 高原利生, "TRIZの理想—TRIZという生き方?その2", 第六回 TRIZ シンポジウム, 2010.

[FIT2011] 高原利生, "弁証法論理再構築", FIT2011,2011.

[TS2011] 高原利生, "一体型矛盾解消のための準備的考察—生き方の論理を求めて—", 第七回 TRIZ シンポジウム, 2011.

[MKN] 牧野広義, 「弁証法的矛盾の論理構造」文理閣,1992.

[MKN_TKHR] 高原利生, 同書の AMAZON 書評, 2011